

《優秀賞》

歌枕の浜をもう一度

大阪府

大阪府立水都国際中学校

3年

八木 美薫
やぎ みゆき

「うちの市には、百人一首にも詠まれた砂浜があること、皆知っている？」。小学生の時に先生に問われ、私は初めて自分の住む市に砂浜があると知った。「高師浜」と呼ばれるその浜は、昔は白砂と青松で有名な美しい海水浴場だったという。百人一首が好きな私にとって、その話はとても印象的で心に残っていた。今は漁港になっていて泳げないと知ったときは悲しかったが、どんな所なのかずと気になっていた。

ある日、その漁港でスケッチをする授業があった。意気揚々と漁港に足を踏み入れた私は、浜辺を見て驚いた。波打ち際にはたくさんのごみが打ち寄せられ、かつて歌に詠まれた美しい海岸の面影がなかったのだ。海の水も濁っていて、釣り具が浮いていた。私は浜辺の様子が気になったが、先生に波止場の方へと促され、砂浜には近づけなかった。この出来事はずっと私の心の中でぐるぐると渦巻いていた。

だから、高師浜で海岸活性化イベントがあると知ったとき、私は迷わず参加を決めた。イベント当日、漁港に行くたくさんの人がトングを持ち、砂浜や磯のごみを拾っていた。そして、驚いたことに砂浜はあの日より少しきれいになっていたので。後から知ったことだが、私が活動に参加する前から何度かにわたって海岸の清掃や、浜にきれいな砂を運び込むなどの取り組みが行われていたそう。地元の水を守ろうと活動する人がたくさんいることに私は感銘を受け、慌ててトングとごみ袋をもらって自分も清掃を始めた。

ごみが以前よりは少なくなったと言えど、あれよあれよという間に三十リットルのごみ袋は膨らんでいった。ペットボトルやお菓子の袋、中にはゴルフボールまで。岩と岩の間の小さな隙間にもごみが落ちていて、拾えないものもあった。フジツボがついたペットボトルも拾った。プラスチックの分解に長い時間を要することは知っていたが、誰かが軽い気持ちで捨てたごみがずっと自然の中に残り続けることを実感し、私たち

が負うべき責任の重さを感じた。清掃が終わると、砂浜にはパンパンになったごみ袋の山ができていた。私が拾ったごみはそのほんの一部だったが、地域に貢献できたことが誇らしかった。

ごみ拾いの後にはアマモを移植した。アマモは「海のゆりかご」と呼ばれ、魚の住処になったり、水を浄化したりしてくれる植物だ。スタッフの方に聞くと、アマモは暗く涼しい環境を好む繊細な生き物なので、いくつかの団体で協力し苦労しながら育てたという。今は小さなそれが、一メートルほどに成長して多くの生き物が暮らす家になる、ということはとても素敵なお話だった。

私はこの経験を通して、私たちに水を届けてくれる自然をきれいに保つことの難しさに気付いた。水をきれいにしようと動く人がいても、水を汚す人がいる限り、この問題は解決できない。調べてみると、二〇五〇年には海洋プラスチックごみの量が海にいる魚の量を上回るという予測もされているそうだ。生物濃縮といって、海水に混ざったマイクロプラスチックや有毒成分が魚などに蓄積されると、それを食べる人間にも悪影響が巡ってくる。海や川で暮らす動物だけでなく、この水の惑星に住む生き物すべてにとつて、水は単なる「飲み物」ではなく、「住処」だ。私たちの住処を守るため、私も清掃活動が続けることはもちろん、環境に優しい洗剤を使ったり、ごみの分別をきっちりしたりするなど、自分にできることをしたい。

海岸活性化イベントの最後に、キジハタの稚魚放流を行った。稚魚と高師浜の海に眩きながら、私はバケツの中の小さな命を海へと放った。

「元気に育ってね」